イエスとシナゴーグと聖書の公開朗読(PRS)

作者

チャールズ・キム (Charles Kim)
The Grace and Mercy Foundation

トミー・ギブンズ博士 (Dr. Tommy Givens)
Fuller Theological Seminary

日本語訳

小山 健
単立・岐阜純福音教会・牧師 / 関西聖書学院・教師

ともに聴く聖書
Public Reading of Scripture

イエスは答えられた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる』と書いてある。」

マタイの福音書 4:4

イエスとシナゴーグと聖書の公開朗読(PRS)

～イエスの生涯における「シナゴーグの役割」と現代の「聖書の用い方」への示唆～

作者

チャールズ・キム (Charles Kim)
The Grace and Mercy Foundation

トミー・ギブンズ博士 (Dr. Tommy Givens)
Fuller Theological Seminary

日本語訳

小山 健
単立・岐阜純福音教会・牧師 / 関西聖書学院・教師

ともに聴く聖書
Public Reading of Scripture

無料の聖書アプリ

オーディオブック

Version 2.0
© 2025 The Grace and Mercy Foundation

聖書 新改訳2017 ©2017 新日本聖書刊行会

目次

はじめに..... 7

沈黙の年月：イエスの公生涯以前の形成期を垣間見る 8

紀元1世紀初頭におけるシナゴーグの重要性 14

イエスのシナゴーグへの出席とそこで彼が習得した知識 26

シナゴーグ慣習の視点から見た、テモテへの手紙 第一 4:13の「聖書の公開朗読（PRS）」の理解 30

シナゴーグ：当時と今 36

はじめに

本稿は、イエスの公生涯（公の宣教活動）以前のあまり知られていない時期に着目し、シナゴーグ（ユダヤの会堂）およびその関連する慣習への参加が、イエスご自身の形成期に特にどのような重要な役割を果たしたかを考察しています。また、一世紀ユダヤ人社会におけるシナゴーグの中心的意義と聖書の公開朗読（The Public Reading of Scripture）[i]を通して共同体としての礼拝を促進する重要な役割をシナゴーグが担っていたことを明らかにしています。

イエスのシナゴーグでの慣習を探ることにより、イエスご自身の形成において、聖書の公開朗読（PRS）がどれほど重要であったのか、私たちは深く理解することができます。これはまた、今日イエスに従う人々にとっての基礎的な模範でもあります。パウロが、テモテや初代教会に「聖書の朗読」に専念しなさい（テモテへの手紙 第一 4:13）と勧めたように、イエスご自身の実例は、キリストの弟子として生きる上でこの習慣が普遍的に重要であることを再確認させてくれます。

イエスのシナゴーグでの慣習を探ることにより、イエスご自身の形成において、聖書の公開朗読（PRS）がどれほど重要であったのか、私たちは深く理解することができます。

チャールズ・キム　トミー・ギブンズ博士 2025

[i] The Public Reading of Scripture の直訳は「公開朗読」であるが、一般財団法人日本G＆M文化財団で呼称として使用するPRS(英語の頭文字)をこの訳文では併記する。

沈黙の年月：
イエスの公生涯以前の
形成期を垣間見る

イエスは神と人とにいつくしまれ、
知恵が増し加わり、背たけも伸びていった。
ルカの福音書 2:52

イエスの生涯のうち、公生涯以前の時期については、記録はほとんど残されていません。福音書は、イエスの公生涯における自己理解や使命について多くを伝えていますが、それ以前のイエスの形成期に関する詳細は、ほとんど記していません。唯一、ルカの福音書だけがイエスの少年時代について言及しており、イエスが12歳の時、家族と共に過越しの祭りのためにエルサレムを訪れた様子を記しています。神殿という知的・霊的中心地において、イエスは教師たちの話しに熱心に耳を傾け、聞いていた人たちをみな驚かせるほどの知恵をもって、熱心に質問をしていました（ルカの福音書 2:46b-47）。

そしてルカは、イエスの少年期の成長を『イエスは神と人とにいつくしまれ、知恵が増し加わり、背たけも伸びていった。』（ルカの福音書 2:52）とまとめています。正典福音書は、バプテスマのヨハネから洗礼を受ける前のイエスの形成期に関しては、それ以上の詳細を伝えていません。しかし、イエスが公の人物として登場する際に、すでに身に着けていた慣習については記しています。例えばル

カは『イエスは彼らの会堂（シナゴーグ）で教え…ご自身が育ったナザレに行き、いつもしているとおり安息日に会堂に入り、朗読しようとして立たれた 。』（ルカの福音書 4:15-16）と語っています。シナゴーグとそこでの慣習は、イエスの時代において、ユダヤ人の生活の中心的な存在であり、イエスがガリラヤとユダヤ地方のシナゴーグでその使命を果たしていた姿を、正典四福音書は記しています。したがって、イエスの形成期に関しては、当時のユダヤ人社会における社会的・宗教的証拠を通して、イエスがシナゴーグの慣習とそのリズムによって育まれていったことを、私たちは推察できるでしょう。

シナゴーグではさまざまなユダヤ教の慣習が行われていましたが、その多くは教育を目的としており、その中でもイエスの時代に最も重要であったのは、律法（トーラー）と預言書の公開朗読（PRS）でした。敬虔なユダヤ人として、イエスもこのユダヤの慣習に積極的に参加していたと考えられます。すなわち、定期的にシナゴーグに集い、訓練を受けた朗読者によって長時間にわたって大きな声で朗読されるみことばに耳を傾けていたのです。その他の典

16 それからイエスはご自分が育ったナザレに行き、
いつもしているとおり安息日に会堂に入り、
朗読しようとして立たれた。
17 すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、
その巻物を開いて、こう書いてある箇所に目を
留められた。
18 「主の霊がわたしの上にある。
貧しい人に良い知らせを伝えるため、
主はわたしに油を注ぎ、
わたしを遣わされた。
捕らわれ人には解放を、
目の見えない人には目の開かれることを告げ、
虐げられている人を自由の身とし、
19 主の恵みの年を告げるために。」

ルカの福音書 4:16-19

礼や祈りとともに、イエスは継続的にみことばを聴き、唱え、人生の中心的な柱として、みことばを心の中に深く取り込んでいきました。実は、これは当時のユダヤ人共同体全体にとっての生活の柱でもありました。この慣習は、異邦人による捕囚や異国による支配、同化による民族消滅の脅威にさらされながらも、ユダヤ人が世代を超えて、自らの記憶と民族としての命を保ち続けることを可能にしました。ですから、公生涯が始まる時までに、イエスが、シナゴーグでの聖書公開朗読（PRS）に参加することを「いのちを与える慣習」として身に着けていたことを福音書から見出すことは、不思議なことではありません 。

このような形成的な土台によって、記録にのこされていない年月の間に、イエスはみことばの深い知識を培うことができたのです。イエスのシナゴーグでの礼拝への継続的な参加〜時折の参加ではなく、毎週参加する定着した習慣〜は、イエスの継続的な献身を表しています。みことばを聴くことを中心とした定期的な礼拝を通して、イエスは将来の働きのための霊的・知的基礎を築いていったのです。

イエスが完全な神であると同時に完全な人であったことを踏まえると、イエスが人として、どのようにして神とその言葉を知っていったのかを問わなければなりません。イエスはその神性によって生まれながらにしてそれらを理解していたのでしょうか？人としての学びの過程を通して、それらの知識を得て行ったのでしょうか？

イエスはその神性によって生まれながらにしてそれらを理解していたのでしょうか?人としての学びの過程を通して、それらの知識を得て行ったのでしょうか?

ここでの関心は、これらの質問に関して神学的な推測に踏み込むのではなく、むしろ人としてのイエスが、神の言葉と深い関係を持っていたことの重要性に光を当てることにあります。解釈は様々ありますが、当時の敬虔なユダヤ人の生活を考察することで、イエスの習慣についての洞察を得ることができます。特に、定期的にシナゴーグでの礼拝に参加していたことは、イエスがどのようにして自らの召命、使命、働きについての意識を深めていったのかを理解するための、具体的な手がかりとなります。

紀元1世紀初頭における シナゴーグの重要性

ユダヤ社会におけるシナゴーグの起源とその初期の発展に関しては、学術的な議論が続いています。しかし、歴史学者たちは概ね、その早期からの存在を認めています。これらの議論に共通するテーマの一つは、共同礼拝の慣習を導入した人物として、モーセの役割を認識している点です。伝統によれば、モーセは神の指示に従い、ヘブル人を定期的に集めて神の律法を朗読させ、これを聞かせるよう命じたとされています。

神の言葉を記録し、公に朗読した聖書的根拠は、出エジプト記に最初に現れます。出エジプト記 17:14では、神がモーセに『このことを記録として文書に書き記し、ヨシュアに読んで聞かせよ。』と命じています。この命令は、出エジプト記

24:4-7でも再確認されており、モーセは神のことばを書き記し、それを民に読んで聞かせます。神の言葉を朗読し、聴く習慣は、出エジプト記 34:27でさらに強調され、神はモーセに『これらのことばを書き記せ。わたしは、これらのことばによって、あなたと、そしてイスラエルと契約を結んだからである 。』と命じられます。これらの命令が繰り返されていることは、その実践がいかに基礎的かつ重要であるかを強調しています。

12 民を、男も女も子どもも集めなさい。あなたの町囲みの中にいる寄留者も。彼らがこれを聞いて学び、あなたがたの神、
主を恐れ、このみおしえのすべてのことばを守り行うようにするためである。
13 これを知らない、彼らの子どもたちもこれを聞き、あなたがたがヨルダン川を渡って所有しようとしている地で、彼らが生きるかぎり、あなたがたの神、
主を恐れることを学ばなければならない。」
申命記 31:12-13

モーセは、一連の説教を通して伝えた別れの言葉の中で、律法を聞くことの重要性を改めて強調しました（申命記 31:12-13）。彼は指導者たちに対し、男も女も子供も寄留者も、全ての共同体の民を集めるように命じました。それは彼らが、神のみおしえを聞いて学び、主を恐れ、みおしえを守り行うためでした。この

主はモーセに言われた。「このことを記録として文書に書き記し、ヨシュアに読んで聞かせよ。わたしはアマレクの記憶を天の下から完全に消し去る。」

出エジプト記 17:14

4 **モーセは主のすべてのことばを書き記した。モーセは翌朝早く、山のふもとに祭壇を築き、また、イスラエルの十二部族にしたがって十二の石の柱を立てた。**

5 **それから彼はイスラエルの若者たちを遣わしたので、彼らは全焼のささげ物を献げ、また、交わりのいけにえとして雄牛を主に献げた。**

6 **モーセはその血の半分を取って鉢に入れ、残りの半分を祭壇に振りかけた。**

7 **そして契約の書を取り、民に読んで聞かせた。彼らは言った。「主の言われたことはすべて行います。聞き従います。」**

出エジプト記 24:4-7

共同体としての集会は、神の律法に通じていない者たち、特に子どもたちが、約束の地に入るための備えとして、敬虔と従順の人生へと導く役割を果たしました。そしてこれは、後に続く世代をも形づくる継続的な慣習となるべきものでした。

その後、ヨシュアはモーセの具体的な指示に従いました。『ヨシュアは、みおしえの書に記されているとおりに、律法のすべてのことばを、祝福ものろいも読み上げた。モーセが命じたすべてのことばの中で、ヨシュアが、イスラエルの集会全体、および女と子どもたち、および彼らの間で生活する寄留者の前で読み上げなかったことばは、一つもなかった。
ヨシュア記 8:34-35

ヘブライ語聖書において「リクロー（*likro*）」という動詞は、ただ単に「読む」という意味だけでなく、「呼ぶ」「宣言する」という意味も含んでいることを認識することは重要です。[1] この意味合いはトーラー（律法）が共同体の人々によってただ黙読されたのではなく、人々の集会の中で声に出して宣言されていたことを示しています。朗読

者が記されたみことばと向き合う一方で、共同体全体は神のことばを、聴覚を通して体験していたのです。したがって、神のことばは「見るもの」ではなく「聴くもの」として意図されており、目よりも耳を通して受け取られるものでした。

しかし、約束の地に入った後、神のみおしえを共同体の集会で公に読むという契約上の義務を、イスラエルの民は忠実に守り続けることをしませんでした。主のみわざを覚えず、認めようとしない世代が現れ、その結果、神のみおしえが民全体にないがしろにされるようになりました（士師記 2:10）。この軽視が、イスラエルの歴史において長きにわたる霊的衰退の時代をもたらしました。それでも神は誠実であり続け、繰り返し士師たちを立て、神の民を導き、救い出されました。しかし、その後の王国時代においても、神の言葉を顧みない姿勢は、繰り返されていきました。主を心

ヘブライ語聖書において「リクロー（*likro*）」という動詞は、ただ単に「読む」という意味だけでなく、「呼ぶ」「宣言する」という意味も含んでいることを認識することは重要です。

から慕い求めた王もわずかにいましたが、多くの王たちは神の道を離れ、主の目に悪とされることを行いました。

ソロモンの子レハブアム王の時代に王国が分裂した後、聖書の公開朗読（PRS）は甚だしくないがしろにされるようになり、その結果、律法の書は完全に忘れ去られてしまいました。北王国イスラエルは、他の神々の虚偽の約束を追い求め、その民は侵略され、捕囚にされ、滅ぼされました。一方、南王国ユダでは、紀元前7世紀のダビデ王家の子孫であるヨシヤ王の治世になるまで、律法の書が発見されることがありませんでした（列王記 第二 22-23章）。この発見と、それに続く聖書の公開朗読（PRS）は、ヨシヤ王の元での大規模な宗教改革と霊的リバイバルを引き起こしました。

その後、ユダ王国の民も捕囚にされ、エルサレム神殿は破壊され、混乱の時代が訪れます。その中で、ユダヤ人共同体と宗教生活における中心的な存在とし

てシナゴーグが現れました。離散し、神殿を失ったにも関わらず、捕囚されたユダヤ人たちは、トーラーを共同体の中心に据えることによって、契約の民としてのアイデンティティを保ち、家々に集い、離散した各地にシナゴーグを築きました。そして、エルサレムに帰還し神殿の再建に携わったわずかな者たちは、捕囚時代を通してシナゴーグでの礼拝によって確立された聖書の公開朗読（PRS）という伝統を最も大切にしました。

エズラの指導のもと、ネヘミヤ記8章に記されているように、町の広場で大規模な聖書の公開朗読（PRS）が行われ、イスラエルが失ってきたものへの深い悲しみが起こりましたが、集まった民の間に喜びと新たな献身が起こりました。

イスラエルの民の一部がカナンの地に帰還したことは、神のことばに聞き従うことへの献身を新たにし、霊的大リバイバルをもたらしました。エズラの指導のもと、ネヘミヤ記8章に記されているように、町の広場で大規模な聖書の公開朗読（PRS）が行わ

れ、イスラエルが失ってきたものへの深い悲しみが起こりましたが、集まった民の間に喜びと新たな献身が起こりました。

この出来事は、捕囚から帰還した者たちにとって重要な転換点を示すものであり、カナンに戻った者たちだけでなく、世界中に離散したユダヤ人の新たな献身をも表していました。捕囚の間ユダヤ人たちは、伝統的な神殿儀礼をシナゴーグでの礼拝の形に適応させていき、聖書の朗読と教えを共同体生活の中に深く組み込んでいきました。これらの適応は、彼らの霊的アイデンティティに大きな影響を与え、エルサレム神殿での礼拝から各地域での礼拝実践への移行を可能にしました。

第二神殿時代の後期には、シナゴーグはイスラエル人の礼拝と共同体生活における不可欠な中心として確立されていきました。第二神殿期ユダヤ研究の第一人者であるE.P.サンダースは、このような発展を、古代シナゴーグにおける礼拝実践の文脈の中で詳しく

論じています。サンダースは、一世紀の著名なローマ・ユダヤ人歴史家であるフラウィウス・ヨセフスを引用し、モーセが民に定期的に集まり、ヘブル語の聖書から聴き学ぶように命じたことを、一世紀当時のユダヤ人たちが信じていたことをヨセフスが記録していたと述べています。[2]

エルサレムで発見され、紀元前1世紀初頭のシナゴーグに関して記された最古の碑文は、シナゴーグの中心的な目的を明確に示しています。それは「トーラーの朗読と戒めの学び」のためであり、関連するもてなしの儀式のために建てられたものでした。[3]

ユダヤ学の研究者であるエリック・メイヤーズは、古代のシナゴーグにおいてトーラーの巻物を納めるために設けられた箱である「トーラーの櫃（ひつ）」すなわち「アロン・ハコデシュ」の重要性を考察しています。この聖なる空間は、ユダヤ人の宗教的生活においてトーラーが中心的位置を占めていることを象徴しています。マイヤーズによれば、この櫃（ひつ）とその中

に納められた巻物は、共同体の中で、どれほどみことばが高く敬われていたかを表しています。[4]

シナゴーグの役割は、新約聖書においても明確に認められます。使徒の働き 15:21で、筆者であるルカは『モーセの律法は、昔から（すべての） 町ごとに宣べ伝える者たちがいて、安息日ごとに諸会堂で読まれているからです。』と述べています。「（すべての）[ii]町ごとに」という言葉の包括的な意味は、安息日にみことばが朗読されるという伝統が、ユダヤ人の宗教的生活の柱として広く根付き、長く続いてきたことを強調しています。

> モーセの律法は、昔から町ごとに宣べ伝える者たちがいて、安息日ごとに諸会堂で読まれているからです。
> 使徒の働き 15:21

新約聖書学者のレイチェル・ハクリリはこの点をさらに強調し、『ヘブライ語聖書[iii]の共同朗読は、第二神殿時代において単なる一要素ではなく、シナゴーグ制度を特徴づける本質的な要素であった』と断言しています。この慣習は不可欠なものであり、シナゴーグではトーラーや他の聖書の巻物が

[ii] ギリシア語の原典では「すべての町で」と直訳することができるため、補足。
[iii] 元々の筆者のレイチェル・ハクリリの引用では「ユダヤ教の聖書」。

保存され、公に朗読され、教えられ、ユダヤ人の宗教的・共同的生活の中心としてのシナゴーグの役割を確固たるものとしました。[5]

考古学的証拠と学術的研究を照らし合わせると、シナゴーグは、みことばの公開朗読（PRS）という週ごとのリズムを維持する重要な役割を果たし、ユダヤ人に霊的な養いと強い共同意識をもたらしました。この環境は、幼いイエスを育む背景となり、後にイエスの教えと使命の土台となるみことばを内面化する場となったのです。

> この慣習は不可欠なものであり、シナゴーグではトーラーや他の聖書の巻物が保存され、公に朗読され、教えられ、ユダヤ人の宗教的・共同的生活の中心としてのシナゴーグの役割を確固たるものとしました。



これらは、イスラエルのガリラヤ湖近くにあるカペナウムの古代シナゴーグの写真です。現在見られる印象的な白い石灰岩の遺構は4〜5世紀に建てられたシナゴーグのもので、その下には、福音書に登場する1世紀のシナゴーグの跡だと多くの研究者が考えている黒い玄武岩の基礎があります。これは、ローマの百人隊長が資金を提供した可能性のあるシナゴーグだとされています（ルカの福音書7章1-5節）。





イエスのシナゴーグへの出席とそこで彼が習得した知識

歴史的・宗教的な文献の分析を踏まえると、イエスが当時の他のユダヤ人と同じように、主にシナゴーグにおいて神の言葉に出会っていたことが鮮明に描き出されてきます。巻物は希少で高価であり、神聖であったため、大工の息子として育ったイエスの家族が個人的に聖書の写本を所有していた可能性は低いでしょう。さらに重要なことは、聖書は個人的に読むための書物としてではなく、公に朗読され、聴かれるべき言葉として捉えられていたことです。したがって、イエスがシナゴーグにおける礼拝生活に積極的に参加してい

さらに重要なことは、聖書は個人的に読むための書物としてではなく、公に朗読され、聴かれるべき言葉として捉えられていたことです。

たことは、聖書によって彼が形成される上で、極めて重要な役割を果たしました。

福音書は、イエスがシナゴーグで神の国について教え、病の癒しを行っていたことを繰り返し記しています（マタイの福音書 4:23-25）。十字架に架かられる直前の最後の日々においても、イエスはシナゴーグや神殿に身を置き、神学的対話に参加していました。また、当時の慣習に従い、シナゴーグの正式な礼拝時間外でも教えを説くこともあったようです（ルカの福音書 4:16）。

このように、イエスの深い聖書理解は、幼少期から一貫してシナゴーグでの聖書の公開朗読（PRS）に参加してきたことによると考えられます。イエスは、ユダヤ人共同体の他の人々と共に集まり、彼自身がよく知っていた申命記 8:3のみことばの通り「主の御口から出るすべてのことば」を注意深く受け取っていたことでしょう。

それで主はあなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの父祖たちも知らなかったマナを食べさせてくださった。それは、人はパンだけで生きるのではなく、人は主の御口から出るすべてのことばで生きるということを、あなたに分からせるためであった。

申命記8:3

シナゴーグ慣習の視点から見た、テモテへの手紙 第一 4:13の「聖書の公開朗読（PRS）」の理解

12 **あなたは、年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。むしろ、ことば、態度、愛、信仰、純潔において信者の模範となりなさい。**

13 **私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えに専念しなさい。**

テモテへの手紙 第一 4:12-13

使徒パウロは、テモテに対して、自身がエペソに戻るのを待つ間、聖書の朗読と勧めと教えに「専念」しなさいと指示しました。この指示は、初代教会生活の重要な要素を示すものであり、テモテへの手紙 第一 4:12で強調されているように、その若さにもかかわらず、テモテの牧会的リーダーシップの重要性を肯定しています。パウロが同13節で用いた「専念」という言葉は、持続的な献身を呼び掛けるものであり、キリスト教礼拝においてこれら（聖書の朗読と勧めと教え）の実践が果たす重要な役割を強調しています。

「聖書の公開朗読（PRS）」という表現は、ギリシア語の「アナグノーシス（*anagnōsis*）」という言葉から翻訳されたもので、特に今日私たちが旧約聖書と呼ぶ聖書の公開朗読（PRS）を表しています。この慣習は、ヘブライ語聖書（旧約聖書）が毎週の安息日や聖なる祭り、その他の機会にシナゴーグに集まった会衆に向けて、長時間にわたり朗読されていた、ユダヤ人のシナゴーグにおける伝統を反映しています。

ユダヤのシナゴーグの伝統に倣い、初代教会も定期的な集会で、通常はギリシア語訳を用いて旧約聖書の公開朗読（PRS）を行っていました。また、クリスチャン共同体で回覧された使徒の手紙や福音書の交読も行われていました。4世紀に新約聖書が正典化される前から、これらの文書はヘブライ語聖書（旧約聖書）と並んで、神の霊感によるものとみなされ、神の人がすべての良い働きにふさわしく整えられるため、教えと戒めと矯正と義の訓練に用いられていました。

当時の聖書の公開朗読（PRS）で重要な点は、わずか数節を数分で読んだ後で、教師が長時間にわたって解説をするような形式ではなかったということです。むしろ、聖書そのものがかなりの長さで朗読され、多くの場所では、共同体が1年のうちにトーラー全体と預言書の大部分を聴くことができるほどでした。これは、毎週数時間にわたってみことばに耳を傾けることが必要であったことを意味します。2世紀のローマのクリスチャン、殉教者ユスティノスは、当時のキリスト教徒たちが日曜日のほとんどの時間を共に集まり、福音書や旧約聖書のみことばを共に聴くことに費やしていたことを記しています[6]。こうして、聖書の長い箇所を定期的に公開朗読（PRS）することは、イエスの時代のユダヤ共同体から、数世代後のイエスの弟子たちの集いに至るまで、神の民の

むしろ、聖書そのものがかなりの長さで朗読され、多くの場所では、共同体が1年のうちにトーラー全体と預言書の大部分を聴くことができるほどでした。

生活の糧であったのです。

紀元後4世紀に至るまで、イエスの弟子たちは、聖書の公開朗読（PRS）の伝統を含む自らの生活や礼拝の慣習をユダヤ共同体の継続と捉えていました。その時代のヨハネス・クリュソストモスは、当時の多くのクリスチャンが土曜にはシナゴーグに、日曜日には教会の礼拝に出席していたことを述べています。この現象は、ユダヤ教とキリスト教の礼拝の連続性を示しており、キリストを中心としたキリスト教の慣習が新たに形成されていく中でも、ユダヤの儀礼的要素が維持されていたことを表しています[7]。初期のクリスチャンたちは、パウロがテモテに指示したように、聖書の公開朗読（PRS）の実践を継続しただけではありませんでした。彼らは、福音書の朗読やキリストを覚える食事といった要素を取り入れ、ヘブライ語聖書（旧約聖書）に根差した神の言葉に、忠実に従う生き方をされたイエスの生涯と教えに、彼らの礼拝の焦点を当てることでこの慣習を適応させていきました。

この現象は、ユダヤ教とキリスト教の礼拝の連続性を示しており、キリストを中心としたキリスト教の慣習が新たに形成されていく中でも、ユダヤの儀礼的要素が維持されていたことを表しています。

シナゴーグ：当時と今

二千年以上前のイエスの定期的なシナゴーグ出席が、現代の私たちクリスチャンにとってなぜ重要なのでしょうか？究極の従順の模範として、イエスは父なる神に対して、完璧な傾聴を体現されました。キリストの弟子たちもまた、神の言葉に真摯に取り組むことを通して、キリストのかたちに変えられることを追い求めるよう召されています。パウロはローマ人への手紙の中で、聖霊が、信徒たちが造り変えられていくことを可能にすることを強調して

> **神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。**
> ローマ人への手紙 8:29

います。『神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです』（ローマ人への手紙 8:29）。

今日のシナゴーグ礼拝における聖書の公開朗読（PRS）は、厳格かつ敬虔な伝統に即して行われており、まず厳粛な行列を作り、トーラーの巻物を櫃（ひつ）から取り出すことから始まります。会衆の指定された者たちが、年間および季節ごとの聖書朗読表に従って、旋律のある詠唱で聖書箇所を朗読します。通常その朗読は45分から60分続きます。朗読の後には、祝詞が唱えられ、巻物は丁寧に櫃（ひつ）に戻されます。この長く敬虔な朗読は、シナゴーグ礼拝の中心を成し、祈り〜主に祈祷書からの詩篇〜、ラビによる短い教え、他の儀礼的要素と共に行われます。

この共同体が共にみことばに耳を傾けるという実践を、数千年にもわたり継続してきたことは、キリストを信じる者たちにとって、イエスの礼拝習慣と深い繋がりをもたらします。

幼少期から成人に至るまで、イエスは常にシナゴーグでの礼拝に出席し、神の言葉を聞き、それを心に深く刻み込んでいました。父なる神に注意深く耳を傾け、忠実に従う究極の模範としてイエスを認めることは、信仰者たちがイエスの例に倣う招きです。それは、聖書の公開朗読（PRS）に積極的に参加することを通して、自らの霊的いのちを培い、神との関係を深めていくようにという招きなのです。

この共同体が共にみことばに耳を傾けるという実践を、数千年にもわたり継続してきたことは、キリストを信じる者たちにとって、イエスの礼拝習慣と深い繋がりをもたらします。

脚注

1. Jonathan Sacks, Genesis: The Book of Beginnings (*Covenant & Conversation 1*) (Kindle Edition), 203.

2. Steven Fine, *Jews, Christians and Polytheists in the Ancient Synagogue* (Taylor and Francis, Kindle Edition), 3.

3. Cited in Steven Fine, *This Holy Place: On the Sanctity of the Synagogue during the Greco-Roman Period* (Chicago: University of Notre Dame Press, 1997), 30.

4. Steven Fine, *Jews, Christians and Polytheists in the Ancient Synagogue* (Taylor and Francis, Kindle Edition), 178.

5. Jordan J. Ryan, *The Role of the Synagogue in the Aims of Jesus* (Fortress Press, Kindle Edition), 69.

6. Justin Martyr, *First Apology*, 67.

7. James H. Charlesworth, “Prolegomenon to a New Study of the Jewish Background of the Hymns and Prayers in the New Testament,” Journal of Jewish Studies 33 (1982): 269–270, cited by Paul F. Bradshaw, *The Search for the Origins of Christian Worship* (Oxford Press, 2002), 33.

Notes

Notes

Notes

Notes

Notes

16 それからイエスはご自分が育ったナザレに行き、
いつもしているとおり安息日に会堂に入り、
朗読しようとして立たれた。
17 すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、
その巻物を開いて、こう書いてある箇所に目を
留められた。
18 「主の霊がわたしの上にある。
貧しい人に良い知らせを伝えるため、
主はわたしに油を注ぎ、
わたしを遣わされた。
捕らわれ人には解放を、
目の見えない人には目の開かれることを告げ、
虐げられている人を自由の身とし、
19 主の恵みの年を告げるために。」

ルカの福音書 4:16-19

イエスは答えられた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる』と書いてある。」

マタイの福音書 4:4

ともに聴く聖書
Public Reading of Scripture

prsi.org/jp